

かわさき区の宝物シート

宝物No.	たなべしんでん 田辺新田
23-4	

エリア	田島地区	シーズン	通年
	小田・浅田	日時	

目的	<input checked="" type="checkbox"/> 観る <input type="checkbox"/> 遊ぶ・体験する <input type="checkbox"/> 食べる <input type="checkbox"/> その他
宝物定義	<input type="checkbox"/> ものづくり <input type="checkbox"/> イベント・祭り <input type="checkbox"/> 味づくり <input type="checkbox"/> にぎわい <input type="checkbox"/> 現代の文化的なもの <input type="checkbox"/> 港めぐり <input checked="" type="checkbox"/> 歴史的なもの <input checked="" type="checkbox"/> 人物



田辺家墓所(田辺佐五右衛門の墓石)



昭和6年当時の富士電機製造川崎工場全景
提供：富士電機システムズ



写真提供：倉形泰造氏



昭和10年当時の渡し船の風景(左)と「海水浴前」駅と発着場があった竹の下付近の現在

所在地	川崎区田辺新田・小田7丁目
問い合わせ	
TEL	
FAX	
E-mail	
URL	
交通	JR川崎駅よりバス「富士電機前」下車



基礎情報

■田辺新田は、江戸前期の下新田・稻荷新田、中期の池上新田に次ぐ4番目、江戸時代最後に開発された海浜新田である。代々小田村の名主をつとめていた旧家・田辺家の「田辺佐五右衛門」による天保年間(1830~43)後期の開墾と推定されており、名前の由来ともなった。現在の小田7丁目を含む32町歩(約31.7ha)という広大な敷地は、大正時代まで田辺家の地主経営の場として存続していた。

■大正12年(1923)に日本初の日独合資会社として知られる富士電機製造(株)(現在の富士電機グループ)に産業道路以南を工場用地として譲渡し、現在に至っている。現在でも川崎区内で「新田」のつく唯一の行政地名として知られている。

由来・エピソード

■富士電機製造(株)は、陸海運輸に便利な条件を備えた「橘樹郡田島村田辺新田浅間前耕地」48,030坪を工場用地に選んだ。当時は大正6年(1917)の高潮による大水害後の荒廃した水田地帯であったとい、直ちに着工の手筈は整えられたものの次には大震災の発生によって中断を余儀なくされた。幾多の障害を乗り越え、大正14年(1925)4月に富士電機川崎工場は完成を迎えた。「この辺りは松並木に囲まれ、地名が示すように水田で、測量のため歩き回った人たちの靴が泥だらけで難渋した」と、富士電機の社史には記されている。

■現在の浅田小学校は、戦禍によってほとんどを焼失してしまった約3000坪もの田辺家の屋敷地跡及び富士電機の社宅があった場所に、戦後の昭和27年(1952)新たに建てられた学校である。また小田2丁目にある田辺家墓地「田中の寮」には、田辺佐五右衛門をはじめ代々の田辺家の人々が安らかに眠っている。

■昭和初期のこと、京浜運河の開削によって浚渫した土砂を投棄していた場所が次第に砂州となり海水浴場へと発展した。現在の扇島(日清製粉の沖合あたり)は“遠浅・近い・きれい”という三拍子そろった「扇島海水浴場」として、ひと夏に20万人もの多くの人出でにぎわい、春には潮干狩も行われた。現在の竹の下踏切あたりには昭和6年(1931)8月に鶴見臨港鉄道「海水浴前」駅が夏季限定で開業し、ここから扇島まで動力船に曳航される渡し船が海水浴客を運んでいた。

補足・その他

関連シート

- (22-2) 鶴見線
- (23-1) 田中の寮(田辺家墓所)
- (23-3) 下新田